
IS 何回か転生(?)する人の物語

起源はきっと厨二病の人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 何回か転生(?)する人の物語

【Zコード】

N7031Y

【作者名】

起源はきっと厨二病の人

【あらすじ】

何処にでもいるような一般ピーポーが突然テレビからのなぞの光で別世界に来た!そして、その世界で「五臓六腑撒き散らしても生き残つてみせる!」と頑張る物語

プロローグ的な（前書き）

はじめまして起源はきっと厨二病の人です
この作品が処女作となります

誤字脱字がかなり多くなつてしまいますが暖かい目で見守ってくれるとうれしいです。

なおこの作品は厨二病てきなものがありこんな〇〇じゃないなどといったものがあると思いますがそれが嫌な人は戻ることをお勧めいたします（汗）
それでもよければぜひともご覧ください

プロローグ的な

皆はよくネットで見るような一次創作のよつて自分が転生や憑依、トリップをしてみたいと思つたことはあるだろつか？

俺もつらやましいと思つていたが・・・まさか、何処にでもいそつな一般ピーポーの自分が経験するとは思ひもしなかつた、、、

さかのぼること数時間前・・・

今日も仕事が終わり自分が一人暮らししているアパートへ帰宅してPS3を起動し、ACfaを始めて1時間ぐらいすると急にテレビが光り、気がついたら知らない部屋にいた

そして現在

ここに来て（？）から建物内をちょっと調べてみるとここはどこかの軍事関係の建物ということがわかつた。

「なぜ、人が1人も見当たらないんだ？」

（それにしてもさつきから妙に体に違和感があるな、どうしたんだ・・・？）

などと思つても実際に体に怪我などをしているわけではないが

妙に違和感がある

「なんか目線が低いような……」

とほそりとつぶやいた瞬間、ふと勘つを急いで近くのトイレスルートに駆け込み鏡を見た

そして、そこには・・・昔の自分がいたのだ

（なせ今まで気づかなかつた！？）

彼はもう一度鏡で自分の姿をみて心を落ち着かせるためにゆっくりと深呼吸をし改めて今までの状況を整理してみた

ACfaを始める リリウムたんマジ可愛いよ テレビからなその光が！ 知らない天井だ 俺、若返りました 今ここ

「面倒なことになつた……」

「悩んでいても仕方ないな。建物内をさらに調べるか」

彼はまた建物内を散策しそして一番奥のどでかい扉の前にきた
横にはタッチパネルのようなものがありそこには手形のグラフィック
がある

(なんだ、これは？)

映画によく出てくるような手を触れてやるやつかな?
試しに触つてみるか)

そう思い彼はタッチパネルに手を触れてみると画面にCOMPLEX TEという文字が浮かびでかい扉が重たい音を立てながら開いた

(なんか開いたよー)

そしておれのおれ入っていくところがあったのは・・・

・・・見覚えのある巨大なロボットだった

「なんだ、これは？」

「ものす」く見覚えがあるんだが、まさかな・・・

彼は内心とても驚いている。

なぜならそこにある巨大ロボは・・・昔、自分がPS2でやっていたACLRの機体にあまりにも似ているのだ

「まさか、ACの世界に来たとは信じたくないな」

彼はそつとため息をつき、呟いた

「面倒なことになつた・・・

プロローグ的な（後書き）

最初から駄文でいいません……

これから頑張っていきたいのでもろしくお願いします

第1話（前書き）

すいません今回も駄文です…
戦闘の描写が下手だつたりしてわかりにくいかもしだせんが許してください（汗）

あと独自解釈や独自設定が入るかもしれませんがそういう辺は「」で承してください

俺はとりあえずあのAC中に乗つてみるとした
そして不思議なことに身体が覚えているように次々と「クピット内
を操作することができた

その感覚を元にいろいろな情報を見てみるとこの建物の持ち主とい
のACの所有者欄にレイジ・クゼと書いてあるのだ
ちなみに俺の名前は元の世界では久瀬 零治という名だ
要するに俺はいつの間にかこのでかい建物とACを手に入れてたら
しい

なんともまあ良くてできた「都合主義なことで

そつ思つていて「クピット内からローラーと音がする音をし
たほうをみてみるとそこには携帯端末らしきものがあつてあり画面
には依頼主とかいてあつた

（マジかよ・・・）

と心の中で呟きながらその携帯端末に手を伸ばしたときふと思つた
のだが
この世界に来たということは戦場にたつかもしれないといつて、
すなわち死と隣りあわせということである
そう思つと携帯端末にを取つとしている自分の手が急に重くなつ
たのだ

実際はその手に何か重いものが乗つたわけでもなんとも無いのだ

だが彼は一向にてを動かさないでいる。いや、動かせないでいるのである

そして次第に彼の鼓動は早くなり息も荒くなり体がかすかに震え始めている

さつきA C内のデータを見た限りでもそれなりに依頼をこなしていた、その中には襲撃の依頼も含まれていた

要するにこっちの世界での自分は少なくとも一人以上は殺しているのだ、もしかしたら殺した相手の家族や親しいものが復讐をしに来るかもしれない、いくら戦場だからといつても人殺しは人殺しだ戦場だつたからなどの言い訳は通用しない

ならば自分は生きるためにたとえ無様に這いつくばっても足搔くしかないのだと自分に必死に言い聞かせる

なんにせよ兵器というものを持っているからには戦場からは逃れられないそう考えていると汗が彼の額から目のはうに垂れてきてふと思考の渦の中をさまよっていた意識が我に戻る

そうすると彼はやつと決心して携帯端末を手に取る

そして携帯端末からは男性の声が聞こえた

「どうした？ 隨分と遅いんじやないか、死んじまつたかと思つたぜ」「ガハハ」と相手の男は笑いながら言つた

「すまない、少し仮眠をとつていたものでな」

「おいどうした？ いつもなら皮肉のひとつでも返すのに今日はやけに大人しいなんがあつたのか？」

「いや大丈夫だ、少し夢見が悪かつただけだ」

「ほう、お前が夢を見るとは珍しいな。まあなんとも無いならよかつたが」

「ああ、氣づかいは無用だ。で依頼するために連絡をしたんじゃないのか？」

「おお、やうだつたそつだつた」

と男はまるで今思い出したかのように笑つた言つた

（どうやらこの電話の男とこつちの俺は知りあいようだな）

「お前さんへの依頼内容を渡したいからいつもどおりのマーブルに

2時間後に来てくれ

「わかつた2時間後だな」

「おうよろしく頼むぞ」

そういうと男はまた軽快にガハハと笑いながら電話を切つたのだ

「なんとかやり過ごせたか・・・」

そういうと彼は自分の携帯端末など建物内のあるデータを見る
ことにした

そして2時間後

彼はマーブルという酒場のような場所に来ていた

最初は何処にあるんだろうかとあせつていたが携帯端末内に地図も
あり看板もでかいためすぐに見つけることができた

（それにも色々と情報を整理してみるとどうやら国家解体戦争
の最初のほうみたいだな
まだ新兵器のネクストのも目撃例もないみたいだしな）

そう思つているとこちらに向かつてくる身長が2メートルぐらいあ
りそうな大柄の男が来た

「すまんすまん、待たせたか？」

とさつきの通信越しで聞き覚えのある声が軽く笑いながら言つてきた

「時間通りだ問題ない」

とあくまで冷静なようにかえした

「そうかそうか、ならいい」

といいながら男は席に着く

「ほら、これが今回の依頼内容だ確認してくれ」

そういうと男はデータチップのようなものを渡してきたおそれりへ携
帯端末のものであろう

それを受け取るとレイジは携帯端末に差し込み依頼内容をみた

依頼内容は簡単に言えばアメリカにある大企業の兵器開発工場を潰
すことであった

（大企業の兵器開発工場ということはネクストGAあたりのネクス
トを作つているところか？

まあ何にせよいつネクストが出てくるかわからないからなんともい
えないが）

レイジがそう考へていると

「どうした？ 何か不明なところでもあつたか？」

と男が聞いてきた

「いや、大企業の兵器開発工場というのが少し不安でな
敵の新兵器でも出でてくるんじゃないかと思つてているだけだ」

「ああ、そのことか

それについてなんだが「ジマなんぢやらを動力源として動かすAC
を作つてているみたいだ」

「つ！」

（もうすぐネクストがでてくるのか！？ でたらすぐにお陀仏じ
やないか！）

「その新兵器に対する情報はあるか？」

「あるにはあるんだが不確かなもので向こうに潜らせてる奴からの

情報では7～8割程度完成しているという話だ、完成したら理論上では最強の戦力になるらしいが、まあ要するにそんな化け物みたいな兵器を作られる前に壊してしまおうということだ

レイジはまだギリギリ完成していないと聞くと内心ほっとした

「そうか、それならいい

「あとほかに不明な点はあるか？」「

「いや、無いな。悪いが今日はもう帰らせてもらひ」

そういうとレイジは席を立ち帰ろうとする男が

「今度は、ゆっくり酒でも飲もうか」

と一カツと笑う男に対しても自然と笑みがでて

「そうだなと・・・」

とこいつとレイジは踵を返し出口へ歩いていった

あれから自分の家（？）に帰ってきたレイジはすぐさまマジのショミーラーを使い必死に訓練していた

（やはりこの体が本能的に覚えてているらしいな・・・

それにもまさかこの機体とはなんともいいがたいな向こいつの世界でアセンをまじめに組んでおくんだった・・・）

そう、彼の機体はみんな大好き”ピンチベック”をもとにして右腕武装に N-I-O-H 左腕武装に W-L-O-2-R - S-P-E-C-T-E-R というなんとも微妙なアセンである

（昔の俺は何をしたかったのだろうな・・・）

と内心ため息をつきながらもしつかりとショミーラーで訓練をしついでいるのであった

あれから数日がすぎ依頼当日
(これが初の戦場になるんだ、ゲームじゃない本当に命を懸けることになるんだ・・・)

レイジはもう一度依頼内容をしつかり確認して心を落ち着かせようとしていた

(もうすぐ時間だな・・・)

と思つと「クピットの通信からあの男の声がした

「時間だ、はじめてくれ」

それを聞くとレイジは「了解」と静かに言いブーストをふかし戦場にかけていった・・・

大企業職員 side

今日はコジマ粒子を動力源とするネクストの開発をしている、何とかネクストは9割ほど完成したのはいいがそれに乗る奴が過去の実験でほとんど使い物にならなくなつていて

残念なことにAMS適正が低い奴しかここには渡されていないこんなのじや最強の兵器を作つたつて宝の持ち腐れにしか過ぎないんだがな

「もつといい素材を渡してほしいもんだ」と彼が呟くと施設の警報がなり響いた

side out

レイジは最初に背中のグレネードを打ち次々に建物の主要施設であろう場所を破壊をしていった

半分以上を破壊したころにMTなどができたがどうやら奇襲には成功したらしいMTからの攻撃を次々に避け左腕武装のWLO2R-SPECTERをMTたちにあてていき破壊していく

そして一番重要そうな建物まで扉を破壊して中に入ったそうするとそこにはネクスト次世代ACがあつた

（後はこいつを破壊すれば終わりか・・・）

と心中で呟き右腕武装のWLOHでコア部分を四回ほど打ち込み破壊した

（これで終わりか・・・）

そう思うとレイジは壊滅状態になつた工場を見渡す、するとあたりは火の海である

死体や怪我をしてる人たちがあふれかえつてその中には必死に助けてや死にたくないなどと言うものもあり、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図そのものであつたそれをみると急に手が震えだし汗が溢れてきた（俺が殺した・・・この手で俺が）

そう思つていると建物の瓦礫の影からボロボロのノーマルACがこちらに向かつて銃口をむけ攻撃をしようとしている姿があつた

レイジはとっさに殺されると想い左腕武装のWLO2R-SPECTERでひたすらに相手を撃つた

相手のノーマルACの搭乗者は撃たれながらもオープン回線で

「ちく、しょう・・・よくも、俺の仲間を殺してくれたな・・・」

そういうとノーマルACは完全に沈黙した

彼は依頼主の男からの輸送用の乗り物に乗り

いまだに震えている自身の手をしっかりと握るようにしていったそして最後に倒した敵の言葉や悲鳴などが残つておりあの地獄絵図を思い出してしまい急に胃の中のものがこみ上げてきて嘔吐してしまった（これが戦場・・・生きるために人を殺して、躊躇えばその先にあ

るのは・・・

“死”

そう思うと彼は改めて自分は死と隣り合わせの場所にいることを実感したのであった

第1話（後書き）

次回も下手くそな文章が続いてしまいますがお許しを
そういう主人公設定など書いたほうがいいですかね？

第2話（前書き）

頑張つて投稿してみました！

だけど相変わらずの駄文…

心理描写や戦闘描写を上手く書きたい！

誰か教えてください！（汗）

オリキャラ的なのがいるのはあまり突つ込まないでください（汗）
あと何とか4のキャラを出したり4の主人公になるであろう人物を
出してみましたが…なんというか

第2話

あの初(?)の依頼から一週間ぐらいすぎた頃に携帯端末が鳴り響いた

（また依頼だ）

「衣類か?」

「ああ、なんと今回は僚機をやとつたぞ」

「僚機？」

「ああ伝説のレイウンだそうだ」

「いやすさんが今は手がはなせなくてな、今回はデータをそちらに

メールとして送りせても「ひがい」

「そうか、珍しいなんかないたのか？」

「ほらー、黒理子さんねー」

111

「ん? どうした

・・・) ああ、お前さん」を珍しいなと思うてな、いつもは心配

「では後ほど依頼内容を送らせて貰う。

「ああ、頼んだ」

そういうとレイジは携帯端末の通信を切つた

依頼主の男 side

「ああ、頼んだ」

ところが言葉と共に携帯端末の通信が切れると男は
「・・・すまない」

と静かに呟いたその声はまるで懺悔をするかのような声であった

side out

携帯端末の通信が終わってから数分後、端末からピピピピピと鳴るトレイジは端末を手に取り依頼内容を確認する

今回の依頼内容はスウェーデンにある企業が管理する基地を襲撃するといったものであった

（スウェーデンというと北欧のあたりか？）

そして今回も依頼内容もネクストは居ないらしいそして下のほうにスクロールしていくと僚機についての情報が書いてありそれを見てみる

（なるほどビデオや情報を見る限りLRの主人公みたいだな、頼もしい限りだ

さてミッション開始時は4日後だな今から現地の方へ行って合流するとして）

そう思つとトレイジはすぐさま行動にでた

2日後、彼は上手くスウェーデンのほうに入ることができた
そして自分の僚機になる者に合流をしにいったのだ

レイヴン side

作戦決行まで2日前のこの日に俺は今回の作戦でのパートナーとなる男と会うことになった、たとえ今回しか仲間にならなかつたとしても顔を知つておぐぐらいはしようと思つたのだ、そして俺がそこの喫茶店の奥のほうに座つて待つて待つていると自分と同じぐらいの青年がこちらを見て一直線に歩いてきて彼の座つている奥のテーブルの前に行くとこちらがあらかじめ端末通信で教えておいた軽いハンドサインをしてきたのでこちらもハンドサインを返した

(この青年が今回のパートナーかそれにしても若いな、いや俺と同じぐらいか?)

そつ思つていてる青年が話し始めた

「はじめましてだな、伝説のいや、最後の鴉といったほうが良いかな?」

と軽く笑いながら喋る青年に対してレイヴンは

「いや、どちらでも構わない」

と冷静に返した

side out

「いや、どちらでも構わない」

と表情をまったく変えずにそつなく返されたレイジは内心焦つたのだ

(まずいな、急になれなれしく声をかけすぎたかな?)

本人にしちゃ昔のこといちいち言われたくないのに失礼なことをしてしまつたかな?)

とレイジが焦つていてるとレイヴンのほうも昔オペレーターから自分

は無表情で口数も少なく目も釣り目みたいな感じだから相手に怒つているよな印象を持たせるとよく言っていたの思い出し（いつも悪い癖が出てしまったか・・・）

と後悔していた、するとレイジが

「昔のことを持てに触れてほしくないよな気に障つたようだな、すまない」

と謝ってきたのだ。それを聞くとレイヴンは
「いや、そのことは気にしていない
こちらこそなんか怒つているみたいな印象を与えてしまったようだすまない」

とあわてて返してきたのだ。そして二人は互いのその光景に面をくらい思わず笑つてしまつた

「おつとすまないそいつは俺の自己紹介をしていなかつたな、依頼内容のところで知つてると思つが俺の名はレイジ・クゼだよろしく頼む」

そういうとレイジは右手を差し出しレイブンは

「まあ短い間ではあるかもしれないが、俺の名はレイヴンと呼んでくれ」

と言い差し出された右手を取り握手を交わした

「ああ、よろしく頼むレイヴン」

こうして後にアナトリアの傭兵と呼ばれる男との初の対面だった

そして初めてレイヴンと会つてから一日後、作戦開口

「これからレイジ作戦開始時間となつた、戦闘を開始する」

「これからレイヴン、了解したこちらも始める」

そう通信するとレイジはブースターで移動を始めた

(一回田の戦闘だって言つのに前回より心が断然なれてるな、一回

でなれるとかどうやら俺の心は異常みたいだな)

と思つていろと田的の建物が見えてきた

レイジは戦闘に集中して建物に向かつて背中のグレネードを発射した

戦闘を開始してから約10分ほどたち基地はほぼ壊滅状態となり作戦完了と思った瞬間発砲音とともに隣にいたレイヴンの乗るACの右腕部が吹き飛んだのだ

何事かと思いあたりをセンサーでさがすとそこには・・・ACネクストが三対もいたのだ

(なつ！まさかネクストだと！？どうしてこんなところに…？)

と思つていると通信から依頼主の男の声が聞こえたのだ

「偽りの情報すまんな、悪いが俺はこの戦争に国家側の勝ち田はまったく無いと思つてお前らの情報を売つて安全を保障することにしてもらつたんだ」

彼は淡々と語る

「安心しろお前一人で死ぬわけじゃない、そのレイヴンも一緒に死んでもらうことになつてはいるからな、まあ運が悪かったと思つてあきらめてくれ・・・じゃあな」

と言つと通信は切れて田の前にいるネクストからのオープン回線で喋り始める

「そういうわけで残念だったなあ、時代遅れの鴉どもめ。このヒーローの俺が葬つてやるよ喜べ！」

ハハハと気がふれてるように笑つて言つた

しかしレイジはそんなことを気にせずにレイヴンに通信を送つた

「レイヴン大丈夫か？」

「なんとかな、しかしACの右腕が一撃で吹き飛んだぞ何なんだあ

卷之三

「新兵器AC・NEXTだあれは化物だ、勝ち目が無い」
アーマードコア・ネクスト

それは勿論か。されど、さういふ人が、

「手に分かれて逃げよう」の付近でACを
ぎりぎり逃げらっしゃ。

いくらネクストでもそ

能だ、一緒に逃げてもまとめて殺されるだけだ。安心しろ俺が劣り役に

なるお前は先に行け」

「そんなことしたらお前がただやすまいだろ！？しかも相手は三体いるだろ！」

「まかせルレイギ

「俺の運がお前
まさかせなレーベンか逃げる時間くらし稼げる
よりネクストのこと知つてゐる」

そう語ってもレイジンは一向に自分が生き残る」ことを選択しようとしないでいたするとレイジは

「すまない」

とつぶやきオーバードブーストをふかし去つていいくのを見て

敵ネクスト、赤色のアリーヤのパイロットは

おい、なほ遅に、おおとじてんが、

「 」 というと右手に持っている04-MARVEをレイヴンのACに向けて発砲しようとした瞬間に鈍い発射音と共に横からグレネードが

打ち込まれた

「ああ！？ てめえなにしやがんだ！！」

彼は自分の行動を邪魔されたことに異常な苛立ちをあらわにした
「ふつ、ヒリートは後ろから撃つのが好きな臆病者のことを言うのか？」

と小ばかにしたように言つと

「てめえ、なめた口を利くんじゃねぞ肩が…おイベルリーズ、アンジヒてめえらはこいつとわいを逃げた奴には手を出すなよ！俺が始末してやる！」

と言つと一人からは「好きにしろ」との言葉が返つてきた

（これでこいつ一体なら何とか時間を稼げるか？）

「てめえ、いまから絶対に殺してやるからなあ！」

「へえ、そいつは楽しみだ」

「死ねえ！」

その言葉と同時にO4-MARVEが撃ち込まれた、そして左腕部が吹き飛ばされレイジは急いで建物の瓦礫など入り組んだ場所に逃げた

「おい…さつきの威勢はどうした？ 逃げるのかあ！？」

ヒヤヒヤヒヤと不気味な声を上げながら喋っているのに対しレイジは

「射撃を当てたぐらいで喜んでるとほくだらないな、レーザーソードでも当ててみるよ三流」

とまたも挑発すると

「てめえ今言つたことを後悔するなよ？ お前のACの四肢を切つて最後にじつくりコアを焼ききつてやるよ…！」

そういうと彼は右手からO4-MARVEをすべて左手のO2-D RAGONS LAYERだけとなつた

（下らん挑発にのるとは本当に馬鹿なのか？ それともAMS適正で頭のネジが吹っ飛んだか？ どちらにしてもこちらにチャンスはできたわけだ）

そう思ふとレイジは右背のグレネードをページして相手の目の前に
でた

「やつと観念したか肩野郎めが！」

そういうこちらに向かつて突つ込んでくる赤いアリーヤそれに向かい左背のグレネードを下半身に撃ち込むするとアリーヤはバランスを崩した。いくらネクストにP.A.などがあつても安定性が無ければノーマルが持つバズーカにすら一時的に硬直するのだ

するとレイジはその硬直の隙を見逃さず左背のグレネードをパージ
してOBをふかし相手に向かつて突つ込む
オーバードースト

AYERを振るつた

だが02-DRAGONSAYERが直撃することは無かつた、なぜならば02-DRAGONSAYERはほかのレーザーブレードよりリーチが短いため、自身の武器の特性すら完璧に把握できていない三流リンクスが振るつたところで一撃必殺にはならなかつた。だがレイジの乗るACの頭部に掠つてしまい頭部が吹き飛んだがレイジはとまらずに

と叫び相手のアリー・ヤのニアに右腕部のZHOHを撃ち込む

「ガあアあああアアああアあああ！」

と相手のリンクスはAMSから激的な痛みが伝わってもがき苦しんでいる

レイジはその隙を見逃さずに立て続けにZIOTHを3回撃ち込むと赤いアリーヤは完璧に沈黙したのだ

(「れでもう戦うための武装は無いな、だがレイヴンが逃げる」と

ができるぐらいの時間は稼げただろう（ひつ）

そう思つとレイジはボロボロのACを残りの2対の前に移動し自身ももつレイヴンの時間稼ぎをまだ行うかのよつに立つていた

それをみたベルリオーズは

「なるほど、そんなになつてまで仲間を助けよつとするか

その行為はほかの奴らから見たら無意味や無様などと言われそうだな

なのになぜそんなことをする？死ぬことを受け入れたのか？」

「いや、死ぬのは怖いと、そしてなんもなく無意味に死んでいく

のはもつと怖い、

自分が生きた証を立てずに死んでいくのはそもそも生きていのいのとあまり変わらないと俺は思つてゐる」

と今にも氣を失いそうな自分の体に鞭を打ちそつこたえた。すると

アンジエが

「ならばなぜ今このときも逃げよつとしない？充分にあのACが逃げる時間は稼げただろう？」

と不思議そうに聞いてきた

「逃げる？それもいいかもな、だが前を向かぬものに勝利は無いと思つただけさ」

その後にまあ生きることが勝利なら俺はもつ負け確定だけなと加えて言つた

それを聞いたベルリオーズは

「ほつ、いい戦士だ。お前にもつ一度チャンスをやろつ」

レイジはその言葉がどういう意味かをわからず自分意識を手放したのであつた

第2話（後書き）

ベルリオーズやアンジェ、4の主人公はこんななんじゃねえ！と思われるかも知れませんがそこいら辺はついついまないでくれるとおりがたいです（・・・）

そして次も頑張りたいと思います

第3話（前書き）

え～前回の話でネクストに勝つてますがやじら辻は「都合主義」という形で保管してもらひえるといわしげです（汗）

そして今回も微妙なできですが是非読んでください

「知らない天井だ・・・」

と言つと最初に目に入つたのは白い天井である

（俺はあの後、死んだのか？）

そう思つていると病院で嗅ぐ様な薬品の臭いが鼻を通つてきて、ぼやけた意識を覚醒させていく

（ここは天国じゃないと病院か？）

そう考へると体を起こし周りをみると自分の体に点滴やら医療用のチューブなどが繋がつているのを見る
(まさか気を失つている間に“ナニカサレタヨウダ”つてことになつたのか!?)

などと考へてみると見知らぬ男が入つてきた

「どうやらやつと田が覚めたらしいな」

と聞き覚えのある声

「あなたはまさかあの新型ACに乗つていた人か？」
(もし、そなへにいつの名は

「そうだ、私の名は

“ベルリオーズ”

だ。おぼえておいてくれ

「ああ、それよりどうして俺は助けられたんだ？」

「ふむ、興味がわいたと言つたほうがいいのか？」

「興味がわいただけで助けるのか？まあ、助けてくれたことには感謝する。それとあのとき最後になんか言つてたがどういう意味だ？」

「言葉のとおりだ。お前にもう一度チャンスをやる、自分が生きた証を立てることができる、すなわち、もう一度戦場に立つチャンスをやると言つたんだ。」

「あんたはなぜそこまでしてくれるんだ？それこそあんたが言つていたように他人からみて無意味な行為など言われんじやないのか？」「そうかもしかんな。まあ個人的にだが、よい戦士だと思ってな、見てみたくなったのさ」

なにをとは言わなかつたがそれはレイジもなんとなく“それ”を理解したのだ

「そうか、そういうえば外の状況はどうなつているんだ？」

「ああ、それな」「それならすでに企業側が圧倒的な勝利を収めて終わつた」

とベルリオーズの言葉を扉から入つてきた女性がさえぎり、口にした。するとレイジは

「あの後、たつた一日でか！？」

（いくらネクストが圧倒的に優れているといえ一日ですべてを潰したのか！？）

と驚愕の表情をし聞いてくると

「一日？なにを言つてるんだ？すでに一週間と数日はたつているぞ。」

と呆れたように答える女性

「俺は一週間以上も眠つてたのか！？」

とまたも驚愕の表情で聞いてくるレイジ。それを聞くと女性は

「まつたくいちいちうるさい奴だ、いいかよく聞け、お前は私たちと戦つた後なぜか知らんがそこにいるベルリオーズに助けてもらいこの療養施設に運ばれて、お前が眠つている間に企業側が圧倒的な勝利を收めて戦争は終わつた。そして今日お前が目を覚ましたというわけだ。まつたくなんでこんな奴を助けたんだ・・・」

と呆れたように肩をすくめて言つ女性の言葉に対してベルリオーズは

「よい戦士だと思もつてな、興味がわいたんだ。そういう君もまつ

たく興味がないわけではないだろう?」

そう言わると女性は「ふん」と言いそっぽを向いてしまった

「やういえは彼女の名を言つてなかつたな、彼女は「アンジエだ」。

・・それとまだ、お前の名前を聞いていなかつたな

「ああ、言つたのを忘れていてすまない、俺の名はレイジだ。もう一度言わせて貰うが助けてくれたこと、感謝する」

度言つとレイジは軽く頭を下げた

「なに、あまり気にするな。そしてさつきお前にチャンスをやると

言つたことについてだが、AMSを移植してもらひがいいな?」

と聞くとレイジは

「どのみちそつでもしなきやこの先、戦場では生きていけないんだ
るうつ。移植するなら今からでも俺はかまわん」

と笑つて返した

「理解が早くて助かる。ならば私についてくれ

と言つとベルリオーズが部屋を出て行き、レイジはそのあとについていった

あれから俺はAMS移植手術をして数ヶ月後、はれてリンクスとなつていた

そしてレイジは助けてもらつた恩を返すために2年程レイレナード社のリンクスとして動くことになった

因みにレイジのAMS適正は下の上、良く言えば中の下といつ微妙なものである

(どうやら神様は俺に厳しいらしいな・・・ん?でも確か、AC4の主人公のAMS適正は最悪だったよな、ならうじうじ文句は言つてられないか)

と思い、今日もまたショミリーテーでネクストを動かし、少し休憩していると

「ほり、少しはましんな動きになつてきているじゃないか」

とアンジエが言つてきたのだ

「ほほ毎日乗つてゐんだ少しぐらこましにならなかつたら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな と自嘲氣味に返した

「確かに、どうだ私と戦つてみないか?」

「そうだな、よろしく頼むよ」

そう言い再びショミリーテーに乗り込んだ

アンジエ Side

彼女は今日、珍しく、数ヶ月前に新しくリンクスになつたレイジのショミリーテーの成績を見ている

正直、彼は彼女が思つてゐるよりも成長の度合いが早かつた。

（あいつのAMS適正は下の上であり低いほつだつたな、なのにこれがだけの成長速度・・・いや、むしろ早すぎるぐらいか）

と思つてゐるとレイジがショミリーテーからでてきて近くのいすに座つた

（ふむ、試してみるか・・・）

そう思い彼が座つてゐるほつた歩いていき

「ほり、少しはましんな動きになつてきてるじゃないか」

と言つとレイジは

「ほほ毎日乗つてゐんだ少しぐらこましにならなかつたら三流以下の粗製もいいところだ」

しかもAMS適正も低いしな と付け加えて自嘲氣味に返してきた

「確かに、どうだ私と戦つてみないか?」

と彼女はシコミリーダーに腰をさしながらレイジに言った

「そうだな、よろしく頼むよ」

と言い彼は再びシコミリーダーのほうに歩き出し乗り込んだ。それを見て彼女は

（ふつ、これまでの力、試せらる手もひづく）

と思いつつ、彼のシコミリーダーのほうに歩き始めた

side out

シコミリーダー内の仮想空間の戦場

そこにはアンジェが乗るネクスト・オルレアとレイジが乗るネクスト・アノーニモがいる

オレリアの武装は左腕武装に01 - HITMAN 右背武装にSUBLTAN 肩に09 - FLICKER そしてなによりも彼女の代名詞と言つていいほど特徴のある右腕武装“07 - MOONLIGHT”である彼女の振るう劍は誰よりも美しく、勇ましいものであり剣姫と言つねがふさわしく思えるものである

それに対してもアノーニモの武装は右腕武装に03 - MOTORCO BRA 左腕武装に04 - MARVE 左背武装にTRESOR とこうなんとも特徴の無いアセンになっている

そして一人の「クピット」に開始の合図ができる

すると先に仕掛けたのはアンジェの乗るオルレアである

真っ先に肩の09 - FLICKERを撃つと同時に07 - MOONLIGHTで切りかかってくる

レイジはとつさに左にQBでよけるが07 - MOONLIGHTが少しがすりPAを^{バイブルーム}ごつごつと削られる

そしてレイジはすかさずQBを使い多少距離をとるとQTで体勢を^{クイックターン}

立て直し左手の04 - MARVEをまだこちらに向かわつていないとアンジエに対して（もひつた！）そう思い撃つ

しかしその行動を予めよんでいたかのよにQBで難なく避けたのだがレイジもすぐさまにQBを使い、アンジエに張り付くように移動し、右手の03 - MOTOR COBRAと左手の04 - MARVEを撃つ

それに対してもアンジエも左手の01 - HITMANで撃ち返しながら右手の07 - MOONLIGHTで切り裂こうとどんどんと近づいてくる

レイジも相手の必殺の間合いで入らぬようにQBを使い均衡を保つていた

しかしそうさまその均衡をやぶったのはアンジエであった、アンジエはレイジの一瞬の隙をみて一段QBで一気に詰め寄り右手の07 - MOONLIGHTを振るつた・・・が完全には切り裂いていかつたレイジの突発的な一連QBでなんとか致命傷を避けたのだが（ほつ、今のは完全に決まつたとおもつたんだがな、にしてもなかなか当てるじやないか。なら次は強引にいかせてもらおう！）そう思いながらアンジエは攻撃の手を休めずにいた。^{アーマーポイント}そしてレイジは（危なかつた、何とか致命傷にはならなかつたがAPとPAを）つそり持つてかれたな、にしてもさつきから攻撃がどんどん鋭くなっているな・・・しかたないこは賭けに出るか）

と考え左手の武器を背中のTRESORに切り替えアンジエに向かいQBをすると

アンジエは好機と考えレイジに向かい07 - MOONLIGHTで切りかかつた

するとレイジは07 - MOONLIGHTがあたる直前でTRESORを撃つと同時に右にQBをしたが避けきれず07 - MOONLIGHTがほぼ直撃してしまつたのだ、するとアーマーモのAPは0となり「OUSE」と書つ文字がレイジのショミレーターに浮かび上がつた

（やつぱりかー！）
と思いつレイジはシユミーノーターをでた

アンジュー side

（最後のあいつの一発もし直撃していたら私は負けていたかもな。
強いな・・・この先が楽しみだ）
と心の中で言つと彼女は自分でも気づかぬうちに笑っていた
(やはりベルリオーズの見込んだとおりかもな、よに戦士になりそ
うだ)

そう思つシユミーノーターからでた

side out

アンジューがシユミーノーターからでるとレイジは
「やつぱりアンジューは強いな、勝てんな」
「ふつ、お前も予想より強くなつたじやないか」
と珍しくレイジのことを褒めたのだ
「やうか、ありがとう。だが次は勝てるよつになつてやるわ」
「よく言つ、簡単には勝たせやしないさ」
そつとアンジューはシユミーノータールームを去つていく
そして扉をでると
「君が褒めるなんて珍しいな。いいことでもあつたのか？」
と聞くベルリオーズに対し
「やうか？まあ、あいつはお前の言つたとおり、よこ戦士になるか
もな」

そう言つと彼女は廊下を歩いていった
するとベルリオーズは彼女の言葉に對して「ほつ」と言つてソコミ
レータールームに入つていった

そしてこのあとレイジはリンクスN.O.・29をもりこ
シコミレーターでベルリオーズにぼくぼくにされるのであった

第3話（後書き）

相変わらずベルリオーズやアンジーは「んなんじゃねえ！」と思われますよね・・・。

あとリンクスN.O.29ですが実際はAC4開始前に倒されているらしいんですがそこら辺は少し独自設定的なものを入れさせてもらいました

次も頑張って書きたいと思います

早く時間を進めたい・・・

第4話（記憶せん）

えへ、今回も無駄に長いし駄文です
いろいろとキャラが安定してなく読みづらっこますが、すみません（汗）

そして、もう田代になにやら…と思われる方もいらっしゃると思う
ますが
ISの世界に転生するのねもう少し先になります
一応今週中にはISの世界にいくつもつでおつまみのドリンクが温かい皿で見守つてください（――・）

レイジ side

「リンクス、お疲れ様です。そちらに輸送用のトレーラーを回しますので、それに乗り帰還してください」

と言いオペレーターからの通信が切れるとPAをきり、肩の力を抜くと今までのことを少し思い出していた

昔は戦場なんてものはアニメや漫画、ゲームでしかりえないと思っていたのに自分が今この場にいること馴染んできているのが非常に不思議に感じる。今でも夢を見ているんじゃないかと思うぐらいいだ、最初のミッションでの地獄絵図を見たときガタガタ震えて嘔吐をしてしまっていたのに今ではその地獄絵図の状態で敵の兵士などが命乞いをしても躊躇わざに引き金を引けるほどまでに自身の心は変わってしまつているとすると複雑な気持ちになる。

アニメや漫画、ゲームの戦争の殆どは主人公達がいてその主人公達と敵対するものがほぼ必ずと言つていいほど世界を混乱に陥れるためにだの言い主人公達のほうに必ず大義名分があるようになつており、しかも事情があつたり、悪に利用されて戦つている人達や事情を知つた主人公達はその人達を殺さないで事情を解決したり悪を倒してハッピーエンドとなるようになつている。

だが実際の戦場と言つものはそんなものではない。戦つものにはそれぞれの思惑があり片方が絶対的な悪というのは存在しないのであ

る。誰かが正義と思つてゐることは他の誰かからみれば悪になるかもしれないのだ。そして戦場では一瞬でも引き金を引くことを躊躇えばその先に待つのは“死”というものだ。例え相手が家族を人質にとりられて戦うしかないとしてもだ。そういう悲劇的な相手に対しても命を奪う非常さがなければ生きていくことは難しいのだ。

そう考へてゐる間に遠くに輸送用のトレーラーが見えてきてレイジは考へることをやめて帰還の準備をした。

side out

そしてレイジは輸送用トレーラーで近くのロードーに帰ってきて町を歩いていると大きな荷物を必死に持つてゐる少女がいた、見ていると今にも転びそうでとても危なつかしい様子である。
(ふむ、手伝つてやるべきか? だがいきなり見ず知らずの他人が手助けしようとしても、不審者にしか見られないからなあ)

そう考へてみると少女がとうとう転んでしまい中にあるものをばら撒けてしまい近くにいた軍隊のような服装をした男達3人ほどの集団に当ててしまったのだ。

すると少女は

「「、「ごめんなさい!」」

と慌てて誤る。しかし男は

「おい、お譲りやんなしてくれてんだ! 靴が汚れちまつたじゃないか、どうしてくれるんだ?」

と因縁をつけてきたのだ。だが少女は必死に謝ることしかできない

「ほ、本当に」「めんなさい！決してわざとじゃないんですよー。」

ともう一度謝るが

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあー。」

と、やたらに怒鳴りつける

「俺らはこの町を守っている偉い人たちなんだよ、謝つただけで許してもらえると思つてんのか？」

と他の男が言いそれに続きわざと男が

「この靴とか高かったんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今すぐ弁償してくれよ、お譲りやん」

そうは言つても子供が10万などといつ大金を持つてはるはずがなく払えるはずがないのだ。しかし男達は無理に要求してくる

「なあ早く払つてくれよ」

とさりに催促してくる

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持つてないですーー。」

なみだ目になりながらも必死に訴えてる少女。

「へえー

と言ひながらその少女をなめまわすように見ると

「じゃあ悪い子にはちょっと、お話しないとね」

と言ひと強引に少女の手を引き路地裏の暗いほうへ連れて行ひとする。少女は助けを周りに求めるが通行人は見てみぬふりであるまあ軍人みたいな相手だと自分の身がかわいくて誰も助けることはしないだろう

（なんつうか、アニメや漫画でありそうな光景を目の当たりにするとは思わんかつたが、まあ俺も流石に子供を見てみぬふりをするほど腐っちゃいないからな、全く面倒なことになつた・・・）

そう言ひと男達がいるほうへ歩いていった

今日は、おつかいに来ました。そして今日のおつかいはいつもより荷物がいっぱいです。だけどほかの子のみんなのためにつきつけんめい運んでいます。するとつまづいてしまい途中で転んでしました、やつぱり一人で来ないでお姉ちゃんに手伝つてもらえばよかつたなと少し後悔しました。

わたしは急いで散らばった荷物を拾おうとしました、すると男の人たちがこちらをにらんでいます。わたしはおそるおそる男の人たちを見ましたすると荷物の中にあつたジャムが男の人たちの中の一番背が高い人の靴にかかってしまつて見ついているのを見てあわてて

「う、ごめんなさい！」

と急いで謝ります、ですが男の人は

「おい、お譲ちゃんにしてくれてんだ！靴が汚れちまつたじゃないか、どうしてくれるんだ？」

と怒鳴られてしまいました。わたしは必死に謝ります
「ほ、本当にごめんなさい！決してわざとじゃないんです！」

ですが男の人は

「わざとじゃないからって許されるものじゃないだよなあ！」

とさらに怒鳴りつけてきます。すると

「俺らはこの町を守つている偉い人たちなんだよ、謝つただけで許してもらえると思ってんのか？」

と一番目に背が高い男の人が言つてきました。どうしよう、偉い人なのにと必死に考えてると

「この靴とか高かつたんだけどなあ、10万ほどだったかなあ？今すぐ弁償してくれよ、お譲ちゃん」

とさつきの男の人から弁償をしろと言われます。そんなこと言われてもそんな大金は持つていません。ですが男の人は
「なあ早く払つてくれよ」

とさらに言つてきました。ですがわたしは孤児でたとえ孤児院に帰つてもうつてくることなんてできません

「そ、そんな！わたし10万なんてお金は持つてないです……」
と、わたしは泣きそうになるのを必死にこらえ言いましたすると男の人は

「へえー」

と言つと私のことを気持ち悪い目でじつと見てきます。すると
「じゃあ悪い子にはちょっと、お話しないとね」

と言つとわたしの腕をつかみどこかに連れて行こうとしてきます。
わたしは必死に抵抗しましたが大人の力には勝てず、どんどん引き
ずられていきます。わたしは必死に周りの人に助けを求めるますが周
りの人たちはみんなこちらをチラッとみるとすぐにどこかに行つて
しまいます。わたしを助けてくれる人が誰もいないのだと、そう思
うと今まで抵抗してた自分の力がゆるみもう駄目だなと思つと

「おい、下衆どもその手をさつさと放してとつとと消えうせろ」
と黒い髪に黒いコートを羽織つた男の人が言いました。するとわた
しをつかんでいた男の人が

「なんだ、てめえ？お前は関係ないだろすつこんでろ！」

と怒鳴りました。すると黒い男の人は

「さつきの会話からするにたかが10万払えばいいのだろう？」
と言つと財布のなかからお金をわたしをつかんでいる男の人にむか
つて放り投げました。すると

「さつき払えなかつたから利子がついて合計100万払えば許して
やるよ！なんせ俺は偉いからなあ！」

と笑いながら無茶な要求をしてきました。すると黒い男の人が
「どうか、貴様は自分が偉いとか思つてるのか？やれやれ、どうと
う脳みそでもカビたか・・・」

と言つとわたしをつかんでいた男の人が急に黒い人に向かつて殴り
かかりました。わたしは思わず目をつぶつてしまい。鈍い音がして、
おそるおそる目を開けると殴りかかった男の人がおなかの辺りを必
死に押さえてうずくまっています。すると一番目に背の高い人が

「おい、てめえこの人はリンクスだぞ！ てえだしてただですむと思つてんのか？」

わたしは、それを聞いて、とてもあせりました。リンクスという人は戦場で戦うとても強い人だと聞いたことがあります。そんな人に手を出して大丈夫なんでしょうか・・・

「ほう、そいつはリンクスか、笑わせる。俺もリンクスだがそいつのような奴は見たことが無いんだがな、因みに俺のリンクスN。0.は29なんだがな」

そう言うと一番目に背の高い人は顔を真っ青にして

「ほ、本物のリンクス」

と言つとうずくまつてゐる男の人ともう一人の男の人と一緒に急いで遠くに行つてしましました。そして黒い人はこちらのほうを向くと近づいてきました。そして黒い人はわたしの頭に手をのせると

「大丈夫か？ よく我慢したな」

と言いました。するとわたしは急に涙がでてきて泣いてしまいました。すると黒い人は抱きつき声を上げて泣いてしまいました。すると黒い人は「もう怖くないから安心しろ」

と言いわたしをそつと抱きしめてくれました。黒い人は外見は真っ黒だけど絵本に出てくるような白馬の王子様のようにみえました。

side out

あのあと少女は多少落ち着いたらしく泣き止んだ

「どうだ？ もう大丈夫か？」

「は、はい。その、さつきは助けてありがとうございます！」

「なに、気にするな。やつこやお譲ちゃん、買い物をしてたみたい
だが大丈夫か？」

「あー、どうしよう……」と言つと少女は俯き肩を沈める
「ふむ、買つものはまだ憶えてるか？」

突然の発言に少女はビックリし

「ふえつ？」と素つ頓狂な声を発してしまつた。そして
「はい、一応憶えています……」そう答えると
「そうか、これも何かの縁だしな。俺が代わりに買つてやるよ
「で、でも助けてもらつたうえにそこまでしてもらひのせ……」
と、ためらう少女

「だけどまた親御さんにお金をもらつていくのも大変じゃないか?
「あ、えつと、その、わたし孤児院に住んでいて、親がいないんで
す……」

と少女はだんだんと声を小さくしながら言つのを聞くと
(やつてしました……あまりにもデリカシーの無いことをしてしま
つた……)

そう思い、レイジはどうしようかと考え

「じゃあ、俺が君の住んでいる孤児院にお金を寄付するところ」と
でいいね」と言つが

「で、でもそれは、」とまだ言おうとするのに對して少女の頬を軽
く引つ張り言葉をさえぎると

「まあ、いきなりあつた見ず知らずの人を信用しろと言つのなんだ
が、もうちょっと年上の人を頼つていいくんじゃないか？」
と優しく語り掛けると少女は小さく「くん」と頷くとレイジは頬
から手を放し

「やはり、子供は素直が一番だ」と言つて笑つた。すると少女は手に
軽く力を入れ

「あ、あのーわたしは、リ、リリウムといこますーお、お兄さんの
名前を教えてください！」と力強く聞いてきた

「そういや、言つてなかつたな。俺はレイジ・クゼだ、よろしくな

やつぱりと腰を立ちリコウムとこう少女と買に物をしにでかけた

そして買い物の途中

「やういえば、レイジさん、お金は大丈夫なんですか？」

「ああ、全然問題ないな。リンクスは高給取りだからな」

「リンクスですか、その、怖くないんですか？戦うことだが・・・」

「怖いといえは怖いかな・・・けど、もう慣れてきましたかな？それに、もうこれしか生き方が無いからな」

「で、でも他のお仕事だつて頑張ればみつけられるんじや」

「まあ、できないことも無いだろうが、戦うことしかしてきてない

からな、他の仕事につくのは難しいだろくな」

（レイジさん、なんかとても寂しそうな顔をしつる）リコウムが思つてゐる

「せひ、じんなくらい話はやめよつ・子供には関係ない話だ。」

と言つてリコウムの頭をわしゃわしゃとなで「ふむ、綺麗な髪の毛していゐな」と言つて

「孤児院のお姉ちゃんがいつも一瞬とかしたつしてくられるんです！」と嬉しげに話す。するとリコウムはふと足を止めとある商品棚に置いてある百合の花の髪留めを見ていた。それを見てレイジは「どうした、それが欲しいのか？」と聞くと

「い、いや、とても、綺麗だなと思つて」

「ん？欲しくないのか？」

「そ、それは・・・ほ、欲しいですナビ・・・」「ううんよ」と

答えるリコウム

「よし、俺からのプレゼントだ、買つてやる」

「い、いえ大丈夫です・そこまでしてもいいのは、とにかくつもやはり欲しそうに少し目を輝かせて

「遠慮するな、リコウムも女の子だ小さこりから髪留めの一つ

「つみにつけないと将来もてないぞ」

といい髪留めを買つてリコウムに渡すと、とても満面の笑みだった。

そして残りの買い物も無事に終わリリウムを孤児院に送つていく
と去り際に「縁があつたらまた会おう」と言いレイジも帰ることに
した

そしてそれから数ヶ月後レイレナード社にレイジは来ていた
(ベルリオーズに呼ばれたが、どうしたんだ? 一年間だけといった
がそのあとも一応、レイレナードのリンクスとしているからな・・・
)

と考えているとレイジが待つていた部屋の扉が開きベルリオーズが
入ってきた、すると・・・

「世界を私たちとともに変えないか?」

第4話（後書き）

今回もびみょうでした・・・

そして次から一気に時間を進めていきどうにか今週中にはE-Sの世界にいけるよう努力いたしますのでよろしくお願ひしますm(_-)

第5話（前書き）

え、いつの間にか5000円と1000ユニークを超えてました！

皆さん読んでいただき、本当にありがとうございます！

評価してくださつたり感想を書いていただいた方にとっても感謝感激です。

自分は小説を初めて書く身なのでとても嬉しいです。

今回の話で時間をかなり進めました。

なので予定通り今週中にはE-Sの世界に入ることができるのです。

そして後書きのほうにアンケートみたいなものをしておりますので是非ご協力をお願いします。

第5話

約三ヶ月前、GAにコロニー・アナトリアから傭兵が売り込まれた。そう、リンクス戦争へのカウントダウンの始まりだ。

アナトリアの傭兵は次々と戦火をあげ、さらに、マグリブ解放戦線の出来事により瞬く間にその存在が知れ渡つたのだ。

そして約一週間前に、GAグループ内である事件が発生することになる。GAEが秘密裏にアクアビットと提携しGAグループを離脱するという事件だ。そして、そのことがわかつたGAグループはGAEに対し、アナトリアの傭兵に肅清の意味を込めて“ハイダ工廠”で開発中の巨大兵器もろとも破壊したのだ。このことにより今まで水面下で対立していた企業間の争いが表面上に浮き出てきたのだ。

そして先ほど

「世界を私たちとともに変えないか？」

とのベルリオーズからの突然の申し出にレイジは驚きを隠せないでいた。

「なぜ・・・俺なんだ？」

「あれから、お前を見てきたが、私の予想通り、いやそれ以上によい戦士になっている。だからお前の力を借りたいと思つたのだ。」

そう言うベルリオーズに対してレイジは

「それは買いかぶりすぎだ、ベルリオーズ、俺なんかよりいい戦士は他にいるだろう。俺はあなたの言うような、よい戦士でもなんでもないただのリンクスさ、だからせつかくのお誘い悪いが、断らせ

てもううつ・・・すまない。」

レイジは歯を噛み本当に申し訳なさうにベルリオーズに告げる。

だがベルリオーズは

「そうか、やはりな。お前ならうつむかうと思つてたぞ」と言つベルリオーズの言葉を聞き

「なつ、あんたは俺が断ることわかつていたのか?」

「まあな、だが本当にお前のことはよい戦士だと思っているぞ。まあ、返事が変わることがあれば私に連絡してくれ」

ベルリオーズはそう言つと静かに笑うと部屋を出て行つた

するとレイジは「本当にすまない・・・だが、あんたの“答え”は俺がしつかりとみどじけてやる」と誰もいない部屋で言つた

ベルリオーズ side

やはりレイジは、自身のことを過小評価しそうだな、己を過小評価しそうだと自滅してしまつからな。だが私の思った通りだな。まあ、あいつが加わらないことは残念に思えるが。たとえあいつがいなくても私たちが世界を変えてみせる。

ふつ、それにしても私の“答え”を見届けるか、やはりよい戦士だ。

side out

そしてリンクス戦争は、次第に拡大していった。そして数ヵ月後、レイレナード本社はアナトリアの傭兵により壊滅し、アクアビット社はジョシュア・オブライエンの襲撃により壊滅。こうして主戦力たる一社が壊滅に陥りインテリオルグループは停戦を提議し、リン

クス戦争は幕を閉じたのだった。しかしこの戦争により企業はかつてないほどに消耗し、無秩序に地上の「ジマ汚染はいつに拡大し、多くのコロニーが消滅した。

それにより、人々は汚染された地上を捨て、人類の過半数は清浄な空でクレイドルと呼ばれる巨大プラットホームで生活をするようになった。

一方で国家解体戦争で企業が支配体制を確立した原動力アーマド・コア“ネクスト”と、その搭乗者“リンクス”その圧倒的な力の個体依存性に危機感を抱いた企業により、企業機構“カラード”管下の傭兵として地上に残されることとなる。

今や、企業軍の主力はアームズ・フォートであり、かつて戦場を支配したネクストたちは、この薄汚れた地上で延々と続けられる経済戦争の尖兵と成り果てていたのだ。

そして、リンクス戦争が終結してから約二年後
あの後レイレナードの多くの者達がオーメルサイエンス社に取り込まれていき、レイジもその中の一人であった・・・

「リンクス、実験を開始します」と通信がはいり
「了解」そう短く応えるとレイジは、VOB^{ヴァンガード・オーバード・ブースト}がネクストにちゃんと接続されているかを確認しVOBのスイッチを入れると次第に加速していきある程度加速するとVOBが点火しつきに超加速をする。

レイジは、超加速によるGに耐えながらVOBの数値を確認していく、すると突然コクピットから警告音が鳴り響く。それはVOBに異常が発生しているという警告音だった。
(やはりな・・・)

とレイジは冷静に思う。それもそのはずだ。

レイジはもとはレイレナードの出身、リンクス戦争に敗退しオーメルに取り込まれたのはいいが、オーメルからみれば自分達がレイナードを潰したようなものだ、もしかしたら復讐されるかもしれない。だがレイジは今までオーメルの新兵器の実験などになんもなく普通に受けていた。そう、別にレイジは復讐しようだのなんだとは全く思っていないく、ただ実験の依頼が来たからそれをこなすとうにしか考えていないかった。だが逆に、なにもしなさすぎたのがオーメルから見れば不安だったのだ、以前はベルリオーズなどと一緒にいることが多かったので、実は何か企んでるのではないか、事故を装いレイジを抹殺することに決めたのだ。

（俺は、こんなところで死ぬのか。今までの行いからみれば、まあ、当然か・・・）

と頭で自身の死を思つていても本能は生きようと必死にVOBのパージをしようとしている。考えていることとは全く別の行動をとる体に対しても思わず笑つてしまつ。

（ふつ、そつだつたな・・・俺はどんなに醜くても生きよつとする奴だつたな。なら足搔いてみるか）

そう思いどうにかVOBをはずそうと必死に操作する。やつとの思いでVOBをはずすことに成功したがその直後、VOBが爆発を起こしその爆発に巻き込まれる。するとレイジの乗るネクストはボロボロになり落下する。そして中のレイジも爆発の衝撃が凄まじくそのダメージを受けていた

「がはつ！ ははつ、やつぱりこいつなる運命なのかね・・・まつたく、ついて、ない、な・・・」

吐血し、そう言つとレイジは意識を手放した

とある扇動家 side

私は今日、とある企業の実験場に来ている。

（やはりな、彼のことを事故を装い抹殺しにかかつたか。ふむ、企業としては正しい判断だな。企業の人間の9割は彼が死んだと思っているだろう。だが彼はおそらく生きているだろ。まあ、こちらには都合がいい。さて、あの人がよい戦士と認めた人物だ、接触をしてみるか・・・）

そう思つと、とある扇動家は移動し始めた・・・

side out

レイジはふと目が覚めると目に映るのは白い天井である

「知らない天井だ・・・」

（あれ？なんかこんな状況前にも経験が・・・）

そう思つているとドアが開き、そちらのほうに顔を向けると一人の青年が立っていた

「どうやら田が覚めたみたいだな」

「お前が助けたのか？」

（どつかで見たことある顔だな？どこだつたかな・・・そしてどことなく雰囲気があいつににているしな、こいつもしかして・・・）

「ああ、そのとおりだ。まず名前を伺つてもいいか？」

「名はレイジだ、お前の名は？」

「私の名は“マクシミリアン・テルミドール”だ」

「お前、もしかして昔、何回かベルリオーズと一緒にいたことがある奴だろ?」

「なんだ知っていたのか」

(やはりな、レイレナード時代にたまにベルリオーズと一緒にいるところを見たことがあるしな)

「いや、思い出しだけだ。で、わざわざ助けたからには何か用があるんだろう?」

「まあ、用はあるが、まず先に話をしてみたくてな」

「話?俺なんかにか?」

「ああ、あの人人が高く評価していたから気になつてな」

「あいつは俺のことを高く評価していたが、実際そんなたいそうな人間じやないわ」

(ふむ、聞いたとおり自身のことを過小評価しすぎているな)

「まあ、絶対にありえないが、俺が加わつて戦況が変化するほどものだつたら、俺は、あいつの誘いを断り、見殺しをしたようなもんなんだぞ?」

「戦況が変わるかはわからないとして、見殺しにたと言ひるのは少し違つのではないか?あの人から聞いたぞ、あなたが断つたのを聞いて部屋をでたあと“答え”を見届けると言つてたらしいじゃないか。確かに他の人間からすれば見殺しにしたのと同じになるだろうだが少なくとも私は、そうは思わない」

レイジは今回の実験も自分が事故に装い殺されるであつたと、わかつていてもそれは自身の贖罪だと思い受け入れようとしていた。もしあのときベルリオーズの手をとつていたら、ベルリオーズやアンジエ、友と呼べる者が死なずに違う未来が訪れたかもしれない。だが自身はそれを拒んでしまつた。そして友と呼べる者達が死に、気づいたときには遅かつた。“答え”を見届けると言つても他人から見ればしょせんは自己満足の贖罪なのである。だが目の前の男はそ

のことも理解したうえでレイジの行動を否定せずにいてくれた。もしかしたら利用するために言つてるのかもしれない。だが、そのことがレイジにとつてどこか救われるような気がしたのであった。するとレイジは「ありがとう」と静かに呟いた

「感謝される憶えはないんだがな、受け取つておこい。」

（ベルリオーズ、やはり彼は、あなたの見込んだとおりかもしれない）

「ふむ、話はこれぐらいにして。本題に入つていいか？」

「ああ、かまわない」

「まず私たちがやろうとしていることはクレイドルの前提を覆す明確な反逆行為だそれを理解したうえで聞いてくれ。

一部のものはクレイドルに逃れ、清浄な空に暮らし、一部のものは地上に残され、汚染された大地に暮らす。

クレイドルを維持するために、大地の汚染はさらに深刻化し、それは清浄な空をすら侵食しはじめている。

クレイドルは、矛盾を抱えた延命装置にしかすぎない、このままで人は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。

これは扇動だが、同時に事実だ。

それをよしとしないのであれば、是非、私たちと共に世界を変えないか？」

「ふつ、いいだろう。こんな奴でよければ、仲間になる。」

そういう不適に笑つてみせる

「じゃあ俺はこれからどうすればいいんだ？」

「そのことだが、もう一度、カラードに特定の企業に深く関わらないリンクス、つまり独立傭兵として加わり行動してもらつがいいか？」

「かまわないが、大丈夫なのか？俺は一度、殺されそうになつた人間だぞ？そんなやつがまた表舞台にたつたら面倒なことになるんじ

やないか？」

「大丈夫だ。そのことも折り込み済みで君にはもう一度、表舞台に立つてもいい。まあ、死んだことになつてるから名前などは変えてもらひになるとなるがな」

「わかつた」

「では、新たな名前を決めてくれ。そつすれば私のほうで手をまわしておこう」

（名前か・・・ふむ、少し皮肉にいれてみようか、ならば・・・）
「きめたぞ、新たな名は“ジョン・ドウ”だネクストのほうは“ネームレス・ワン”で頼む」

「“ジョン・ドウ”と“ネームレス・ワン”か・・・ふつ、ずいぶんと意味ありげな名前だな」

「そうだろう？では、これから俺のことはジョン・ドウ、略してジヤックとよんでくれ」

「そつか、よろしく頼む。ジヤック」

そして、この日からレイジは新たな名、ジョン・ドウとなりORC A旅団に加わったのだ

第5話（後書き）

一応、この後は首輪付きは首輪付きで出します

そしてアンケートみたいなものですが、ISの世界に転生させる人で主人公とリリウムを入れる予定でいます

その他に首輪付きも入れようかと思っているんですが

入れてもありじゃないか？と思われる方は 1 で

首輪付きを入れるなんて絶対に許さない！みたいな方は 2 で

感想の一言のほうにお願いします。

締め切りは一応土曜の昼の12時までとしますのでご協力お願いします。m(一一 ;)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7031y/>

IS 何回か転生(?)する人の物語

2011年11月24日20時45分発行